龍膽寺雄 全集

第五巻

龍膽寺 雄 全集 第五巻

昭和五十九年十一月三十日 印刷
昭和五十九年十二月十日 発行

著者 龍膽寺 雄（りゅうたんじ ゆう）
神奈川県大和市中央林間二―一四―五

発行者 龍膽寺 雄 全集刊行会

発売所 株式会社 昭和書院
東京都新宿区神楽坂二―一九
銀鈴会館二〇七号 〒一六二
電話 〇三―二六〇―九三五四
振替 東京七―一八二七二

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価 二、八〇〇円

©1984 Y. RYUTANJI

ISBN4-915122-50-6

目

次

創作小説（昭和初期編）
魔　子……7
珠　壺……34
砂丘で—ある科学者の手記から……106
創作小説（戦前・戦中・戦後編）
梟族の夜の倫理……145
創作小説（最近編）未発表・新作
碧い魚……179
エッセイ
ナンセンス文学論……261

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

随筆
道楽物語……269
詩編……276
初出……283
解説……284

創作小説　昭和初期編

魔子

手術

手術としては麻酔もいらない至極簡単なもので、普通の内膜炎掻把の程度だと聴かされてはいたが、案ずるほどのこともなく方便なもので、赤ン坊のころから医者も薬も手術室も切開刀も、いわばもう慣れッこな魔子は、覚悟をきめると、さッさと自分でさんじゃくを解いて、脚の先からこかしてとった猿股と一緒くたに、脚元の乱籠へ落とすと、手術台の冷たい白エナメルの上へ自分で匐い上がって、コロリと仰に転がったものだ。白い遮幕が天井から垂れて、臍のあたりから先を丁度隠すようになっている。飾りけのない白い石膏の天井、艶々しい白いタイルの腰壁、黄ばんだ白昼の灯を花弁のように無感情に映して、打ち水に濡れているコンクリートの床、これらのものにとりまかれて、手術室は何かしら無気味なナマ明るさを湛えているのだ。それにしても魔子よ、お前は覗かなくて仕合わせだったが、お隣に並んだ同じ型の手術台の下には、ピカピカした大きな真鍮の受皿に脂肪のような赤い液体をトロリと澱ませて、床へたくたま

ったガーゼのきれッぱしが、斑にその血を吸上げているのだ。脚を左右に大きく拡げて水平よりお尻を少し高めにする手術台。でも、遮幕で下半身を隠した魔子は、黒いレザーの枕へおかッぱを敷いて片頬埋めて、はだけて腹の出そうになる著物の前を、気にして指で合わせながら、睫毛を大きく拡げたり、瞳をありッたけに上眼づかいにして、寝台の頭の壁際に並んだ白い器械戸棚の辺を見やったり、ふと、枕元の廻転椅子によって気がかりげに控えた私の顔へ眼を戻して、安心したように落ちついた微笑を漏らしたりするのだ。こんな場合には私の方が不安だ。あの真鍮の受皿に溜んでいる血の色を見ても、私の神経は何かしら不吉なものを感じて総毛立つのだ。遮幕の向こうから時折伝わって来る金属や玻璃器の触れ合う神経質なもの音、人間的な複雑な動揺の気配、医者の言葉少なな合図だとか、看護婦の受応えだとか、——さっき無雑作に手術の開始を宣告して、遮幕の向こうへW・博士が白い手術着姿を隠してから、幕を隔てて耳に伝うこれらの気配と、魔子の表情を掠める匂いのような微細な神経の戦慄とから、私は眼隠しされた世界の何かしら神秘な消息を、頭に描いてみるのだ。母体から剝離されようとしている妊娠三ヶ月の小さな胎児、栄養不良な十八歳の少女の子宮、下からまくりあげた友禅の単重の裾が、腹の上へたくたまって遮幕の下にはみ出ている。平べったく凹んだ胃部の皮膚が独特な濃い生毛をのせて、蒼白く友禅の紅の間に覗いているのだ。指一本ほどの隙だ。そこから私は手術台に載せられた彼女の肉体の苦痛を感じるのだ。彼女は幕の向こうで裸の脚を拡げている。注射針、血の浸んだ脱脂綿、粘膜の襞を両側に拡げて抑えている節の長い白いW・博士の指、そこへ鋭く出入するキラキラしい切開刀、魔子は魔子で、意識をなるべくそこから遠ざけようとでもするかのように、大きく大きく睫毛を拡げて、何か瞳の中へ飛込んで来る特筆大書すべきことがらを、自分の脳髄の中から探しているのだ。手術室の白い天井には蠅一匹とまってはいない。せめて雨漏の汚点でもそこらにあれば、そこから城の銃眼で角笛を吹く小人やら、クラブ化粧料のマークやら、いつかバックミラーの中で彼女に秋波をつかったというタキシーの運転手の顔やらを、彼女一流の想像で見つけ出すことも出来るのだ。だが、白い平担な天井には、ついそこの出窓に載った膿盆の子宮鍼子の沈んだ消毒液か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ら、午前十時の陽射が撥ね返って、アミーバのように脚を素捷こくのばしては、まるく眩しくキラキラと揺らいで、電燈の笠の影絵を時折映したりしているだけだ。どのみちこんな部屋には彼女に気に入るようなロマンスは住めないのだ。医術はロマンスを追廻わしているのじゃなくって、病気を追っかけているのだから！　彼女の大好きな金髪のイゾルデが呑んだ神秘な媚薬なんぞ、ここでは糞喰らえなんだ。あの壁の薬棚に並んだ夥しい硝子瓶を御覧。フォルマリンに浸けられたあの数々の無気味な胎児の中には、指の頭ほどのイゾルデもおれば、豆粒ほどのトリスタンもいるのだ。——

彼女の繊く削った眉の間を、見えるか見えないかほどの神経的な痙攣が掠める。痛いのだ。そうして鋭く彼女の唇のはしを吊らせる。

「痛いですか？もうじき。……」

遮幕の向こうでなだめるようにW・博士が声をかける。俯伏せたままの声だ。彼女は無意識に脚を動かしたらしい。シュウ！　水の奔しる音がそこから伝わって、ピンセットを、博士の声だ。は、は、は！　もうすみました、なかなか痛い？　もうちょっと我慢です。魔子は顔を仰向けて私を見る。痛いのよ、とても痛いの、そういう眼だ。手を差しのべると汗ッぽい指ですぐに彼女はからみついて、靱かに強く私の指を握り締める。友禅の紅の間にしどけなく覗いた蒼白く平たい腹が、煩悶する動物でも秘めているように小さく起伏して、彼女は幾度も枕の上に頭の位置をかえる。頬の片側には一面にキラキラと微細な粒汗が浮いて、手入れの届かないのびたおかッぱが、圧しをしたようにそこへねばりついている。遮幕の向こうの気配はまだまだ熱心に手術が続いているのに、博士の言葉はもうすみましたすみましたの一点張りだ。

痛いかい？

私は危なッかしくてグラグラする廻転椅子から頸をのばして、彼女の横顔を覗いてみるのだ。が、彼女の瞳は大きく拡げた睫毛の蔭で、じッとどこか空間の一点をみつめているだけだ。眼元にあるかなしほどにじんだ涙。そこへ小さな小さなもう一つの瞳のように、天井から垂れた黄ばんだ白昼の灯が映っている。彼女は睫毛一つ戦がさないのだ。私は彼女の指のからんだ手先にちょいと力を入れてみる。と、合図に応えるように彼女も指先に

力を入れて、そこを靴かに締め返すのだ。眼の位置は微動だにさせずに、私の尖った神経は彼女の心理を触知しようと、涙を透してはすに彼女の瞳に視入るのだが、そこには天井の灯を映した例のもう一つの瞳が微細な真珠のように、無心にとまっているだけだ。生理的なあのからだの変調以来、彼女の心理の片隅には妙な神秘な領域が巣喰いはじめた。頭のてッぺんから足の爪先まで、からだにも心にも私にとってはもうかけらほどの秘密をも持たない彼女だ。彼女の自分でも覗けないところにこッそり隠れている蚤の頭ほどの小さな墨子さえ、私は彼女のからだのある秘密な部分の眼標のように、ちゃんと覚えている。彼女の歓びも、彼女の悲しみも、そうして睫毛を戦がすほどのほんのちょいとした彼女の神経の慄えも、彼女の心理の地図面を掠めたあらゆる瞬間の、どんな微細な感情のきれッぱしでも、ちゃんと私の虫眼鏡に廓大されて、はッキリ私の心理に現像されてしまう。少なくも私は彼女については精巧な写真器をいつも持っているのだ。それが、——あの生理の奇蹟と一緒に、いってみれば、おお！　彼女の男の子のような平べッたいお腹に、微細な生命が命を営みはじめると、私の意識の届かない神秘な領域が、グングン彼女の心とからだとに拡がりはじめたのだ。まるでムクムクと蒼空に膨れた墨色の夕立雲だ。ピンの頭ほどもない小ッぽけな生物が、お前の子宮の隅ッこに寄生しただけで、それだけでお前の心とからだとが、案外識った俺の監視からづうづうしくはみ出はじめたのだ！　ついこないだまで、無心な女の子だったお前は、まるで俺のからだの一部のように、俺の支配につつましく柔順だったのに！

私の指にからげた彼女の指は、冷たく柔らかく汗にねばっている。栄養に悴れた貧血性の華奢な爪、静脈を透かせて蟻のように透明な手首の皮膚、病菌の跳躍にまかせている乏しいその底の血色。だが、顔には健康そうな脂汗が浮いて、強情ッ張りらしい太い艶々しい髪が、枕に房々とのたくっているのだ。魔子！　まだまだ病気とは闘えそうなお前のからだだ。赤ン坊を断念したのはお前の聡明だよ。無責任な指の頭ほどの生命と健気な一騎打ちをしたところで、せいぜいみじめな共斃れをするのがせきの山さ。早く身軽になって海へ行くんだ。赤ン坊なんざいつでも産める。血の出る肺を早く海の空気で洗濯しちまわなきゃ！

「さア、今度こそすみました。」

カチリ、切開刀か何ぞを置いて、責任をすましたようなノビノビとした博士の声だ。私は彼女と汗ッぽくからげた指をふぐして、何かなしホッと廻転椅子から立上がるのだ。彼女の顔を覗くともつれたおかッぱを指で掻いて、——彼女もさッぱりとした晴れ晴れしい微笑だ。今朝カフェー『死の仮面』の屋根裏の住まいを出るまで、その瞬間まで心の隅で執着していた、あの神秘な『母性』はどうした？　赤ン坊を現代の医術にもろくも捩り奪られてしまった悲しい子宮の亡霊奴！　いや、可愛いい赤ン坊の顔して俺の魔子に無慙にもさッきまで鉤爪をひッかけていた黒装束の死霊め！　ざま見ろ。が、——勝ちほこった私の瞳の中で、蒼白く悴れた魔子の頬には、歳にも似ず淋しく皮膚の乾いた萎びた下瞼のきわに、敗北した英雄のような悲壮な微笑が、失われた母性の名残を見せ、はかなく消えるのだ。夕映のように。——

「少しあとで出血しますからね。ガーゼをあてて置きましたが。……」

遮幕をくゞって現れたW・博士が、医者らしい機械的な優しさで、著物の前を合わせながら寝台を降りかけた魔子を顧みるのだ。

「明日あたりお乳が出ますよ。」

一体博士は冗談だろうか？　が、まさしく魔子は小さな赤ン坊のママになったのだ！　死産した悲しい三月の胎児のママに。冗談にもお乳が出たら、しかし彼女は誰に飲ませるつもりだ？彼女の頬をもう一度淋しい微笑みが掠めるのだ。冗談じゃない。そッくり赤ン坊を亡した悲しい若いママの表情じゃないか。はだけた友禅の紅の間から瞬間チラと覗いた艶かしい乳房、歳のわりには柔らかく大きく発育した蒼白いそこの膨隆の頭に、はッきりと濃く汚点ついた鳶色の乳首。——が、好みで彼女が締めている紅絞りの羽二重のさんじゃくを、袂を飜してキリリと緻く胴にまきつけると、子供ッぽいおかッぱが房々と頬をかぶせて、彼女こそまだママがいりそうな童女だ。博士は続けるのだ。二三日したら胸をレントゲンに撮りましょうなあ。はッきりとその方の対抗戦を考えて、それから海だ！　いや、あなたのからだには海はいい。牡蠣を食べるのです。牡蠣の味噌汗を。呼吸器なんて断じて癒る病気ですからね。牡蠣を喰べてそして日光浴だ。日光浴が何より肝腎です。丸々と肥って、陽に焼

けて、――ママになるのはそれからです。何しろこのからだじゃア。

私はしかしズボンのポケットに、平べったい財布の中味を感じるのだ。あと三四日入院するとして、医者の払いだけでも百五十円。それから盛り時の避暑地、海へ！俺たちなんざまだいい。このごろは、みじめなプロレタリヤへは、日光さえ万遍なくは届かないのだ！　医者はしかしタウエルの中から生れた節の長い白い指で、呑みさしの贅沢な葉巻をつまんで、朗かにつけ加えるのだ。いや、太陽は有難いです。太陽こそ全人類の、全階級の救世主だ。どんな細菌も日光の中でだけは住めない。海であなたも陽に焼けるのです。真ッ黒に焼けて来るのです。いずれ見事な焼けッぷりを拝見しましょうが。は、は、は！

生　活

魔子のからだに生理的な変調が来たのは六月へ這入って間もなくだ。喰べものの嗜好が突然に全く変わったのだ。そうして、時を定めずに、いわれもなく発作する嘔吐。これは素人眼にもはッきりと推察のつく妊娠の徴候だ。私は彼女とまだ正式な結婚の手続をとっていない。いづれはそうするつもりで二人もいるが、さしあたり生活はまだ変則だ。もともと彼女を東京の私の生活に呼び寄せたのは、彼女と将来の結婚を約して、ともかく私の花嫁として一番ふさわしい教育を、自分の手でほどこしてみよう、そういう口実で、私は私の両親を、特に母親を説いたのだ。彼女が女学校の二年生、十四の歳だ。孤児の彼女は肉身と変わりのない寵愛を受けて、私の両親の許に、少女時代を明るく田舎で送っていたのだ。都落ちしたあの安徳天皇とこれを擁した平家の落ち武者たちとで、古い伝説に夢のように彩られている半島の港街、養殖真珠と珊瑚の収穫とで識られている多胡、あそこが生んだ私たちは叛逆児のそれぞれ一人だ。多胡の宣徳公園に今では銅像になって立っている私の祖父が、独力で多胡をひらいてそこへ自費ではとばを築き、三十軒からの分家を移住させて真珠の養殖をはじめたのは、今から三十年そこそこ前だが、今では人口二万という近海でも指折られる繁盛な港になって、輸出真珠の年産額も全国総産額の実に幾割という巨額にのぼっている。手工業的

だった戸別の真珠養殖場も現在では一つの大規模な会社組織に抱擁されて、私の一家がこれを監理し、東京、神戸、ニューヨーク、パリその他海外六箇所に支店を設けて、手広く国際的な取引を営んでいるが、こうした事業の成功の裏には、祖父から父へそれから私の兄へと、三代に亘る献身的な養殖真珠の研究と巨額な投資とが隠れているといわれている。事実、彼等によって順次に完成されたパイ貝養殖上の例えば特殊な金網生け籠式に関する二三の特許や、真円真珠形成法と色沢補整加工に関する十に近い特許やは、養殖真珠についての純粋な学問的な発見としても特記すべきもので、多胡の真珠養殖場の稀有な事業的成功は、大部分これらの技術上の発見がもたらしたものだとさえいわれているくらいだ。真珠に限らず、あらゆる貴金属宝石類の特殊美は、実に人類の発見した、そうして、人類だけの享有する美なのだ。ところが、——皮肉にも、この人類の独特な文化史が発見したこれらの施設をめぐって、現在では真珠養殖場対沿海一般漁労者等の権利闘争、広い意味での階級紛争が絶間ないのだ。魔子の父はその頃小さな漁村だった羽田に当時権勢を振るっていた網主で、真珠養殖場がそこまで拡張されて漁場が廃止されると、すぐに私の父を社長としてそのころ株式組織に改められた養殖真珠会社の一重役に抜擢されたのだったが、忽ち沿海漁労民の激しい反感を買って土地にいたゝまらず、魔子を懐妊していた病身の妻を私の両親に托したまま、自分で求めてシンガポオルの新設支店へ商況視察に出かけて、そこで淋しく客死してしまったのだ。魔子の母は魔子を産むと間もなく、結核でこれも斃れてしまった。こうして彼女は孤児として私の家庭にのこされたのだ。

私は中学を土地ですますと、すぐに水産講習所に向けられる筈だった。すでに述べたような家庭的な情況が自然私にそれを要求したのだ。徹底的に傲岸な事業家肌の兄とは違って、むしろ海生物の研究家として冷静な科学者である私の父は、私を私の才能のままに生きさせたい意嚮を持っていたが、私を家業に従わせたいという強固な兄の主張と強いて闘う意志もなく、建築美術家になりたいという少年時代からの熱心な私の希望を、消極的な態度で抑えて、家業——真珠養殖事業の面白さを科学者らしく静かに私に説くという程度だった。その間にしかし私の建築美術家希望の熱意は最早抑えがたく高まった

のだ。そのころ父がこんな独特な処世観を語ってきかせてくれたのを覚えている。それによると、――人間もまた植物と同じように生活的には定着性をもっているというのだ。足さえあればお太陽さまと米の飯とはどこへでもついて廻るという考は間違っている。人間もまた植物のように、大地に十分に根を拡げ、しッかとそこに土着して、はじめて養分を吸上げて枝葉を繁らせられるので、むやみな時にむやみな土地に植木を移植しても、それは失敗するように、人間も固定した生活の地盤から軽卒に離れると、お太陽さまと米の飯とに飢えることがある。と、そういうのだ。まさにこれは箴言だった。到頭私は建築美術家志望のやみ難い熱意に駆られて、富裕なそうして地位の高いあらゆる肉親たちとその愛情とを裏切って、単身東京へ出奔したのだったが、煤と埃の巷に忽ち飢えてしまったのだ。その頃よく私は考えたものだ。これだけの人間が東京の街々にはうごめいている。そうしてともかく一人々々どうにかして喰べて生きているのだ。だのに俺一人が、真摯な希望と若い情熱とを持ったこの青年が、いわれもなく、一人こうして飢えなければならないというのは、一体どうしたわけだ？　が、まさに父の言葉通りだ。私は見識らぬ土地に移植された植物なのだ。

魔子を東京の私の住まいに迎えたのは、私の設計になるギンザ裏のカフェー『死の仮面』の豪華な建築が完成して、私の芸術の最もよき理解者である主人公の槇氏の好意で、その屋根裏を永久の住まいに無償で提供されてからだ。この建築は殆ど私の揮身の技倆をたたきつけたもので、出来栄えには自信はあるが、私の芸術的な本来の好みからまだ幾つもの不満があった。要するに主人公の槇氏と私との間に、好みの根本的なところに相容れないものがあって、少なからずその制肘を受けたのだ。一体私の芸術様式は、私自身の持つ二つの相反する傾向の趣味のどちらへかの発展に孕まれるので、一と口にいえば、一方には無際限に緻密に、複雑に、繊細に、華麗に、絢爛に、多彩に、豪奢に、要するに黄金と人工とに飽かして、一方には飽くまでも粗野に、単純に、素朴に、生産的に、科学的に、単色に、要するに生活的に質実に。――この二つの傾向への徹底だ。私はやむなく槇氏の意を酌んで、こゝでは二つのこの趣味の傾向を巧みにつぎはぎした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com